

平成三十年度  
名寄市立大学  
一般入試 後期日程

小 論 文 問 題

試験時間 一〇時〇〇分～一一時三〇分（九〇分）

\*受験上の注意

- ① 指示があるまで開いてはいけない。
- ② 指示に従って、静粛に行動すること。
- ③ 机上には、センター試験受験票、本学受験票、筆記用具、消しゴム、鉛筆削り、時計、眼鏡、目薬、袋・箱から出したティッシュペーパー以外、不要なものは置かないこと。
- ④ 質問、用便その他、特に必要のある場合は黙って手を挙げ、指示を求めること。
- ⑤ 不正を行ったものは試験を中止し、以後の受験資格を失うものとする。

次の文章を読み、あとの問に答えなさい。

昔は勉強ができないのは本人の努力が足りないからだということで、勉強ができる子ほど偉くて、勉強ができない子はダメだという価値観が一般的でした。

ところが研究が進んでいくうちに、遺伝上の問題から勉強ができないというケースもあるということがわかってきました。それを受けて、実力テストの試験の成績を貼り出すといった競争はなるべく避ける学校が増えてきたのです。

学歴社会という考え方も、勉強ができる、できないで人間を判断するのはまずいということで否定されてきました。それが文部科学省の方針だったわけです。

しかし、結果的にそうした競争の要素をすべて取り払うことによって、かえって勉強ができない人の活躍の場を奪う結果になったのです。

成績を貼り出すのをやめるならばスポーツも同じようにしなければならぬという流れになっていきました。これによって運動会の徒競走では手をつないでゴールインするという方法が採用されました。高学年になると、予選制度が導入されたりするようになりました。順番が曖昧になる効果を狙ったのです。こうした流れは、スポーツだけに留まらず、学芸会も集団劇になるとか、ヒロインやヒーローの役を交代で担当するなど、とにかく序列が付かないように配慮が行われました。

そうすると、表向きは誰かが傷つくことは減るかもしれませんが、個性を發揮するチャンスを奪うという問題が出てきたのです。

学校では競争原理を否定しながら、卒業したら過酷な競争にいやがおうでも放り込まれます。そうすると、学生時代に競争のトレーニングを積んでいない人は、人生で初めて心理的なダメージを負うことになります。

順位がつかない徒競走もそうですが、いじめ撲滅運動の影響で学校の中で友人と本音でぶつかりあわなかったり、仲間はずれを必要以上に気にするという状況が今の学校では当たり前になっています。

ところが、そうやって教育された子どもたちが、今度は会社に入って、上司に厳しく注意されたり、怒られたり、あるいは嫌みを言われるだけで、そうした経験がないので、すぐに心が折れてしまうことなのです。そうやって、社会から外れた人間は自己責任で片付けられるというのが日本の現状です。

日本は、子どもはなるべく傷つくことを避ける子ども天国で、大人は激しい競争に一生さらされる大人地獄です。しかし、私たち精神科医の立場からすると、子どもの自殺よりも大人の自殺の数が圧倒的に多いというところに目がいてしまいます。つまり、大人のほうが実は子どもより心が弱いので、子ども時代に「自殺という選択肢を選ばない」メンタル耐性をつけておいてもらったほうが、大人になってから激しい競争社会にさらされたときに自殺が増えないと考えるのです。

現状のように、子ども時代に競争否定教育をやるのであれば、大人になってからも、競争否定を前提にしてもらわないと、矛盾が生じるのです。

実は1980年代までは逆で、子ども時代は受験競争などが激しかったのに、大人になってからは終身雇用、年功序列でのんびりしていました。したがって、最終学歴が高校でも、ちゃんと会社に30年くらい勤めあげて、実力しだいで出世するというのが、当たり前になっていました。

(中略)

こうした教育に関する矛盾を打破するためには、子どもにも厳しい競争を経験させることが必要です。

ところが、世の中では、子どもを塾に行かせる親が悪く言われたり、過保護な親みたいな扱いを受けることが多いのです。それは競争を避ける考え方から来ているわけですが、競争することが子どものためになるのだということを、私たちは伝えなければいけません。そうでなければ、大人の社会も競争はなくなり、欲しいと言いたいくらいです。

もう一つは、日本の悪いところですが、競争原理を導入した場合、個性の判断基準が勉強しかない、というのを改めるということです。勉強ができる人もいれば、スポーツもできる人もいる。そういうように競争のベクトルを増やしていけば、ある競争で負けたとしても別の競争で勝てると思えるのです。

たとえば、アメリカの高校などでは、クラスのヒーローであり競争の頂点に立つのはフットボールのキヤプテンになります。学校では専用の駐車場も与えられますし、学内で注目されるだけではなく、学校外でも名誉に思われます。フットボールは体育会系ですが、実は、このフットボールのキヤプテンと同じ扱いを受けるのが、文系のデイベートのトップ成績を収めた学生なのです。デイベートについては、日本の甲子園の高校野球のように全米大会もありますし、アメリカ人の注目度も高いのです。

(中略)

野球にしろ、勉強にしろ、同じ名誉なことなのだから、祝福すればいいと私なんかは思います。

(「この国の冷たさの正体 一億総『自己責任』時代を生き抜く」和田秀樹著 朝日新書 二〇一六年より)

※朝日新聞出版に無断で転載する行為を禁止する。承諾番号18-3327

問 子ども時代の競争について、あなたが考えることを八百字以上千字以内で述べなさい。